



现代日语形容词的语义指向

——以连用修饰用法为中心

A Study on the Semantic Orientation of
Adjectives in Modern Japanese

研究

费建华 著



中国出版集团

世界图书出版公司

解放军外国语学院博士文库项目

现代日语形容词的语义指向

——以连用修饰用法为中心

现代日本語の形容詞の意味指向に関する研究

——連用修飾用法を中心に

研究



中国出版集团



世界图书出版公司

图书在版编目 (CIP) 数据

现代日语形容词的语义指向研究 / 费建华著. — 广州: 世界图书出版广东有限公司, 2013.4

ISBN 978-7-5100-5930-8

I. ①现… II. ①费… III. ①日语—形容词—语义—研究 IV. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2013) 第 067182 号

现代日语形容词的语义指向研究

策划编辑: 刘正武

责任编辑: 程 静 张东文

出版发行: 世界图书出版广东有限公司

(地址: 广州市新港西路大江冲 25 号 邮编: 510300

网址: <http://www.gdst.com.cn>)

联系方式: 020-84451969 84459539 E-mail: pub@gdst.com.cn

经 销: 各地新华书店

印 刷: 广州市怡升印刷有限公司

版 次: 2013 年 7 月第 1 版 2013 年 7 月第 1 次印刷

开 本: 880 mm × 1230 mm 1/32

字 数: 267 千

印 张: 8.5

书 号: ISBN 978-7-5100-5930-8 / H · 0812

定 价: 37.50 元

版权所有 侵权必究

咨询、投稿: 020-84460251 gslzw@126.com

序

语义指向理论源自汉语语法研究，可以说它是汉语研究对普通语言学的一个贡献，而最先将这一理论系统而又成功地运用到日语语法研究领域的，当推费建华的博士学位论文《现代日语形容词的语义指向研究——以连用修饰用法为中心》。

日语形容词的连用形在句子中可以作连用修饰语来修饰后面的谓语，修饰语总是位于被修饰语（中心词）的前面，这是日语类型学上的一个特点。形容词作连用修饰语时，虽然在句法结构上修饰谓语，但是该形容词的语义未必总是指向后面谓语动词所表示的动作，它有时还会指向前面的句子成分所表示的动作主体或动作客体（即动词的论元）甚至句外（详见本书的有关论述），也就是说句法结构与语义结构并非总是一致的，有时会出现错配（mismatch）现象。汉语中关于语义指向的研究比较成熟，相关成果也不少。但是关于日语连用修饰语（副词性成分）的语义指向，虽然早在 100 多年以前就有日本学者指出过该现象的存在，迄今也有学者对此进行过一定的论述或初步的考察，但没有人真正进行过系统而又深入细致的研究。

作为博士论文的本书借用汉语语义指向的理论，采用定性分析与定量分析相结合的方法，对日语形容词连用形作连用修饰语时的语义指向进行了多视角的描写和研究，证明了语义指向理论跨语言研究的有效性。究竟有多少和有哪些形容词的连用形可以作连用修饰语？形容词连用形作连用修饰语的语义指向都有哪些类型？与之共现的动词都是哪类动词？这些以往的研究几乎都语

焉不详，但我们可以从本书中找到答案。另外，作者所设定的检测语义指向类型的测试框架（テストフレーム）非常新颖，也很实用。总之，本书的独创性是显而易见的，可以说作者创造性地运用了语义指向的理论，堪称学习借鉴的成功范例。

建华积极向上，勤奋好学，是日语界青年学者中的佼佼者，我希望他能不断努力，继续攀登学术高峰，在日语研究方面取得更大的成绩。

建华的博士论文即将付梓，我感到由衷的欣慰，非常愿意将这部力作推荐给日语界的同行们。

是为序。

彭广陆

2012年岁末

于京西寓所牛步居

目 次

序	彭广陆 i
序 章	1
0.1 研究目的	1
0.2 研究対象	1
0.3 研究方法と資料	4
0.4 本書の構成	5
第 1 章 先行研究	9
1.0 はじめに	9
1.1 先行研究のまとめ	9
1.1.1 早期の研究	10
1.1.2 20 世紀 70 年代以降の研究	15
1.2 先行研究の問題点	30
第 2 章 副詞的成分に使われる形容詞	33
2.0 はじめに	33
2.1 副詞的成分としての形容詞連用形について	33
2.1.1 副詞的成分とは	33
2.1.2 形容詞とは	34
2.1.3 形容詞の連用形と連用修飾用法	37
2.2 形容詞の分類	40
2.2.1 意味からの分類	40
2.2.2 時間的限定性からの分類	43

2.2.3 本書の立場.....	43
2.3 副詞的成分に使われる形容詞の計量的統計.....	45
2.3.1 辞書、データベースによる統計.....	45
2.3.2 副詞的成分に使われる形容詞の内訳.....	51
2.4 本章のまとめ.....	52
第3章 形容詞連用形の意味指向概観.....	55
3.0 はじめに.....	55
3.1 意味指向について.....	55
3.1.1 意味指向とは.....	55
3.1.2 意味指向の視点からの先行研究.....	58
3.2 英語と日本語における似たような指摘.....	60
3.2.1 英語の場合.....	60
3.2.2 日本語の場合.....	63
3.3 Aクの意味指向の検証テスト.....	66
3.4 Aクの意味指向のパターン.....	68
3.4.1 文内指向.....	69
3.4.2 文外指向.....	77
3.5 本章のまとめ.....	81
第4章 属性形容詞連用形の客体指向.....	83
4.0 はじめに.....	83
4.1 Aクの客体指向の下位分類.....	83
4.2 Aクの変化客体指向.....	85
4.2.1 変化客体指向のテストフレーム.....	85
4.2.2 変化客体指向に使われる形容詞.....	87
4.2.3 述語動詞の選択.....	107

4.2.4	変化客体について	111
4.2.5	Aクの変化客体指向の制約メカニズム	115
4.3	Aクの不変客体指向	116
4.3.1	動作中の客体の状態を表す	116
4.3.2	客体の原状的な属性を表す	117
4.3.3	客体の量を表す	118
4.4	本章のまとめ	119
第5章	属性形容詞連用形の主体指向	121
5.0	はじめに	121
5.1	Aクの主体指向の下位分類	121
5.2	Aクの変化主体指向	123
5.2.1	変化主体指向のテストフレーム	123
5.2.2	変化主体指向に使われる形容詞	124
5.2.3	述語動詞の選択	133
5.2.4	変化主体について	135
5.2.5	Aクの変化主体指向の制約メカニズム	139
5.3	Aクの不変主体指向	139
5.3.1	動作中の主体（モノ）の状態を表す	139
5.3.2	主体の原状的属性を表す	141
5.3.3	主体（ヒト）の一時的な態度・様子を表す	143
5.3.4	主体の量を表す	145
5.4	本章のまとめ	146
第6章	属性形容詞連用形の動作指向	149
6.0	はじめに	149
6.1	仁田、新川の研究	149

現代日本語の形容詞の意味指向に関する研究

6.2	Aクの動作指向	151
6.2.1	典型的な動作指向のテストフレーム	151
6.2.2	Aクの動作指向のあり方	153
6.3	動作指向になるAクについて	167
6.3.1	動作指向になりうる属性形容詞	167
6.3.2	動作指向に使われない属性形容詞	167
6.4	共起する動詞	168
6.5	本章のまとめ	170
第7章	感情形容詞連用形の意味指向	171
7.0	はじめに	171
7.1	感情形容詞について	171
7.1.1	感情形容詞の特質	171
7.1.2	感情形容詞の連用修飾用法	172
7.2	感情形容詞連用形の意味指向	176
7.2.1	感情形容詞連用形の主体指向	176
7.2.2	感情形容詞Aクの動作指向	185
7.2.3	感情形容詞Aクの話し手の評価指向	188
7.3	本章のまとめ	191
終章		193
8.1	各章における考察の概要	193
8.2	本書の成果と意義	197
8.3	今後の課題と展望	199
用例出典		201
参考文献		205

目 次

付 録 1 本書で用いる記号.....	229
付 録 2 形容詞連用修飾用法の情報一覧表.....	231
后 記.....	261

序 章

本章では、本書の研究目的、研究対象、研究方法と資料並びに本書の構成について述べていくことにする。

0.1 研究目的

現代日本語の文法研究は動詞や動詞述語文を中心に展開しているといっても過言ではないであろう。その研究の進展に伴って、副詞をはじめとする副次的な構文成分に対しても、関心が寄せられるようになっていく。しかし、副詞的成分は文の骨格ではないためか、それについての研究はまだ立ち遅れているのが現状である。特に、副詞的成分（連用修飾成分）に使われる形容詞についての全般的な研究は、管見の限りではまだ皆無に近いようである。したがって、形容詞が副詞的成分に使われる実態、特にその意味的関わり先を明らかにすることは形容詞そのものの全容をより明確化し、副詞的成分の研究をさらに発展させることに役立つのみならず、日本語文法研究や日本語教育及び機械翻訳にも有益であると思われる。

0.2 研究対象

周知のように、文は「命題（言表事態）」と「モダリティ（言表態度）」の2部分から成り立つが、本書では命題（言表事態）の内部で連用修飾の機能を果たす形容詞の連用形に焦点を絞って考察を展開する。具体的には、イ形容詞のク形（以下「A

ク」と表記する)^①を射程に入れて分析する。もちろん、副詞的成分に使われるナ形容詞のあり方を明らかにするのも重要であるが、それらすべてを取り扱うのは必ずしも問題の解決に役立つとは言えないので、ナ形容詞についての分析は今後の課題としたい。

Aクは文法的には後続する述語を修飾しているが、さらに深く分析すれば、意味的には動作（動き）と関連付けている場合のほかに、主体や客体などと絡んでいる場合も少なくない。例えば、

- (1) a 黒板に字を大きく書いた^②。
⇒黒板に大きい字を書いた。
＜「大きく」→「字」（客体）＞
b 太郎は大きく育った。
⇒太郎は成長してもう大きい。
＜「大きく」→「太郎」（主体）＞
c 花子は大きく手を振った。
⇒花子の手の振り方が大きい。
＜「大きく」→「振る」（動作）＞（彭 2005：9-10
(9) (10) (11))

例（1）の下線部の「大きく」は同じAクであり、同じく後続する述語動詞を修飾する機能を果たしながらも、実際に意味的に関わっているのはヲ格の補語（対象語）の指し示す動作の客体

① 感情形容詞の場合は「Aソウニ」の形も取り扱う。

② 例文中の下線は筆者による。以下同じ。

(「字」)であったり、主語の指し示す動作の主体(「太郎」)であったり、述語動詞の指し示す動作そのもの(「振り方」)であったりするのである。この現象は文の文法的な構造と意味的な構造とは必ずしも一致しないことを物語っている(彭 2004、2005)。また、述語動詞のタイプが違うからこそ、同じAクにもかわらずその意味的関わり先が異なることになるのであろう。こういうことから見れば、Aクのような副詞的成分を記述・分析する際に、副詞的成分だけではなく、動詞にも注目する必要があると考えられる。

遑って言えば、例(1)に見られる現象は日本語における新しくて古い問題である。岡田(1900)は早くも次の2つの「軽く」の違いに気づいて、前者の「軽く」を副詞、後者の「軽く」を形容詞とする品詞論的な解釈を打ち出した。その後こうした形容詞の問題をめぐる論説は多く提示された^①。

(2) a 帽子を軽く打つ。

b 帽子を軽く作る。(岡田 1900)

他方、現代中国語の研究においては似たような現象がよく見られる。現代中国語の「状語」^②は後続する動詞を修飾する機能を果たしているが、意味的には常に動作の他に、主体、客体などと絡み合っている場合も多くある。次の下線の「状語」成分は、意味的には主体(例 a)、動作(例 b)、客体(例 c)と関わっている。

① 詳しくは第1章を参照されたい。

② 日本語の「連用修飾成分」に相当する。

- (3) a 他喜滋滋地炸了盤花生米。(彼はうきうきとピーナッツを揚げた。)

喜滋滋地→他（主体）

- b 他早早地炸了盤花生米。(彼は早々とピーナッツを揚げた。)

早早地→炸（動作）

- c 他脆脆地炸了盤花生米。(彼はさくさくとピーナッツを揚げた。)^①

脆脆地→花生米（客体）

中国語の研究では、以上のような分析を「意味指向」^②と名づけている。意味指向の視点を導入すれば、例（1）（2）のようなこれまで暗黙裡に認識されてきた形容詞連用形の文法的関係と意味的關係のズレをはっきり説明できるのではないかと思われる。

したがって、本書では先行研究を踏まえながら、「意味指向」の視点からAクの文法的関係と意味的關係を綿密に考察し、実例に基づいてAクのありうる意味指向を記述・分析することを試みたい。

0.3 研究方法と資料

「文法研究の生命は、まずもって、文法事実の豊かな掘り起こしにある。広範な文法事実が捉えられていなければならない。

① 例 a、b、c は陸（1993、1997）の用例である。日本語訳は筆者による。

② 中国語では「語義指向」という用語が使われている。

さらに、より良い文法分析・文法記述であるためには、掘り起こされた豊かな文法事実が、きめ細かくかつ明示的で一貫性を持ったあり方で分析・記述されていることが要請される」(仁田 2002「はしがき」)。したがって、本書では基本的に実証の方法を採用する。すなわち、大量の実例を集めて分析することによってAクの意味指向を記述することを目指す。

また、必要に応じて中国語や英語の例も挙げることがある。対照研究は直接の目的ではないが、目下のところ、他言語の研究には参考のできる部分も少なからずあり、場合によっては本書の問題の所在を明確にすることにも役立つからである。

資料収集については、日本語の小説などからコンテキスト付けの実例を採集することを主な手段とする。補助的な手段としてはコーパス、データベース、インターネットなどの検索も活用する。

0.4 本書の構成

本書は第 1 章から第 7 章までの 7 章及び序章と終章から成り立つ。以下、各章の概要を示しておく。

序章は、本書の研究目的、研究対象、研究方法と資料及び本書の考察内容を述べる。

第 1 章は、本書の研究内容に関連する先行研究についてのまとめである。代表的な先行研究を概観した上で、その問題点を指摘する。

第 2 章は、副詞的成分に使われる形容詞についての概観である。まず、副詞的成分の位置づけを明らかにする。そして、従来の形容詞の分類を再検討した上、本書の立場を明確にする。

また、辞書やデータベースによる調査や統計によって、形容詞が副詞的成分に使われる量的な実態を明確化する。

第 3 章は、Aクの意味指向を概観する。まず、中国語における意味指向とは何かを明らかにし、英語や日本語に見られる似たような指摘を例示することによってこの研究視点の妥当性を示す。そして、Aクのあり得る意味指向のパターンを探究するとともに、それぞれのテストフレームも設定する。

第 4 章は、属性形容詞Aクの客体指向を検討する。まず、Aクの客体指向の下位分類を明確にする。そして、本章の中心であるAクの変化客体指向を詳しく記述・分析した上、形容詞、動詞、客体名詞三者の相互制約関係から属性形容詞Aクの変化客体指向のメカニズムを明らかにする。最後に、Aクの不変客体指向という周辺的な現象を考察していく。

第 5 章は、属性形容詞Aクの主体指向のあり方を考察する。Aクの主体指向は変化主体指向と不変主体指向に分けられる。不変主体指向は周辺的な現象であるのに対して、変化主体指向は典型的な存在である。変化主体指向は形容詞、共起する動詞および主体名詞の相互制約によって決められる。変化主体指向のあり方を重点的に考察した後、Aクの不変主体指向のあり方を記述する。

第 6 章は、属性形容詞Aクの意味指向が動詞に向けられる場合についての考察である。まず、先行研究の蓄積した成果を踏まえて、Aクの動作指向の具体的なあり方を記述する。そして、動作指向のAクに使われる形容詞と使われない形容詞を考察する。最後に、典型的な動作指向のAクと述語動詞の共起関係をまとめる。

第 7 章は、感情形容詞の意味指向について記述・分析する。まず、感情形容詞の特質とその連用修飾用法について概観する。そして、感情形容詞の意味指向のあり方を具体的に考察する。

終章は、第 1 章から第 7 章までの各章の考察を総括し、本書によって明らかにできた点と、今後の課題として残された点を示す。また、意味指向の視点が副詞的成分の研究において重要な役割を果たしうることを展望する。